

助産院選択女性の出産体験の分析

日 隈 ふみ子*, 吉 川 哉 子**, 武 田 陽 子***

寺 尾 明 子*

Analysis of Women's Experience of childbirth in Maternity Center

Fumiko HINOKUMA, Kanako YOSHIKAWA, Youko TAKEDA

Akiko TERAOKA

Abstract: The purpose of the study is to clarify what women who chose maternity center experienced there in order to review the care for women who experience normal childbirth. During hospitalization, women wrote about their experiences freely and voluntarily. The notes were used as data for the study by analyzing the contents.

As a result, the notes were categorized into ten topics, i. e., "their choice of a place for childbirth," "their wish to make themselves understood," "a place for childbirth as a living space," "attitudes and mindset of midwife," "reliable skills to help deliver a baby," "gratitude," "self-control," "awareness and resolution as a mother," "broader perspective," and "happiness as a woman."

The women chose the place for childbirth for themselves, and make their feelings known within the course of a continuing relationship with the center's midwife. The place where they took health checks and gave birth to their babies was a part of their daily lives, and that made them feel relaxed. In such an environment, they were kindly treated by the midwife, received reliable care, and were thankful to those who looked after them. As a result, they started to have stronger awareness as mothers and the willpower to control themselves, they felt happiness as a woman, and gained a broader perspective on things. Consequently, their experience of childbirth at maternity center was a positive influence in the process of their growth into fully fledged mothers.

Key words: Normal childbirth, Maternity center, Midwife, Experience of childbirth

は じ め に

* 京都大学医療技術短期大学部
京都市左京区聖護院川原町53
** フリー助産婦
神戸市東灘区住吉宮町5-5-12-201
*** フリー助産婦
高槻市真上町1-13-18-204
2000年7月15日受付

イギリスを中心に1970年代から「有効な医療」を追求する動きが起こり、妊産婦ケアについては1989年に *Effective Care in Pregnancy and Childbirth* が出版された。これは無作為対照試験で有効と立証されたデータベースをも

とに the Cochrane Collaboration が集成した妊産婦ケアの治療指針である¹⁾。これらの成果に、女性団体からの出産に関する意見も取り入れ、イギリスの NHS (国営医療制度) は、1992年以降「……マタニティーサービス全てに問題があり、女性たちのニーズは満たされていない」と、女性のニーズに応じたマタニティー政策を積極的に展開している²⁾。また、WHO も医学的介入の多くなった出産現場の見直しをすべく Care in Normal Birth : a practical guide という報告書を出し、正常な出産ケアと診療のあるべき姿を明確にした³⁾。アメリカにおいても1995年「高い帝王切開率はアメリカの恥である。科学的証拠に基づいた医療 (Evidence Based Medicine) が行われるべき」とアメリカ産科医婦人科医学会会長は演説し、妊産婦に対する診療方針の変更を訴えている⁴⁾。

しかし、我が国では、1人ひとりの児は貴重児なので妊産婦は医学的管理下に置くのが望ましいという考え方が、特に産科医を中心として未だ根強く、病産院での正常産ケアの見直しの動きは遅い。

ところが、我が国においても一部の女性たちは、このような妊娠分娩管理のあり方に疑問や不満を感じ、自分たちのニーズに応じてくれる出産の場を選択し始めている⁵⁾。女性のニーズに応じてくれると選ばれる出産場所の一つが助産院である。

助産院を選択する女性の出産に関する自己決定能力は高く⁶⁾、助産院で受けるケアは病産院と比べて、妊娠から出産後のどの時点においても満足度が高い⁷⁾ことが先行研究で明らかにされている。また、継続的なケアを受けることが出来る助産院の方が安全である⁸⁾という論者もいる。だが、昭和40年代に3000か所以上あった助産院はその1割の300か所に満たない数となり、現在、助産院での出産数は全出産数のわずか1%にすぎない⁹⁾。圧倒的多数の女性は病産院を選んでいたのである。

我が国の病産院においても、正常な妊産婦ケアの見直しを図るには、助産院を選択した女性

たちがどのような体験をしているかを把握する必要がある、そこから改善への示唆を得ることが出来ると考える。

そこで、本研究では、助産院で出産体験した女性たちが記述したノートから、彼女たちが妊娠出産をどのように経験し、何を得ているのかについて明らかにすることを目的とする。

研究 方 法

1987年9月から1993年5月までに大阪府内のF助産院で出産した女性が入院中に任意に、自由記述した『うぶごえノート』を用いて、その内容を質的に分析した。まず、研究者間で全ての記述内容を読み合い、文脈を損なわないように考慮しながらコード化し、類似性の高い事項でカテゴリー化した。カテゴリー化された事項の妥当性を検討するために事項の一致率を確認した結果、研究者間において90%以上の一致が得られた。内容は妊娠中の出来事から産後のことまで、多岐にわたっているため、今回は助産院における女性と助産婦との関係に関する部分についてまとめることとする。

研究 結 果

1. 分析対象の特性

『うぶごえノート』への記述者は124名あり、記述者の年齢は20歳から42歳で、初産婦が40名、経産婦81名、初経別不明が3名あった。経産婦の内、出産回数1回37名、同2回31名、同3回10名、同4回1名、同5回1名、記述なしが1名あった。

助産院なので、異常事例は取り扱わないが、分娩時に骨盤位が判明した者1名、分娩後出血が多かった者1名 (入院中に1度病院に行き処置を受ける)、嘱託医からの電話指示で陣痛促進剤を内服した者3名、分娩時嘱託医の訪室を受けたものの、自然に経膈分娩が出来た者が2名あった。児については多指症が1名、出生後児が病院に搬送された者が2名あった。

『うぶごえノート』はB5版の大きさで、1ページには字の大きさにもよるが約300字から

表1 出産場所の選択

出産へのこだわり

- ・健康な女性なら昔ながらのお産が一番、産むなら助産院と思い搜した
- ・お産は病気ではないので病院で産むことには抵抗がある
- ・自然分娩へのこだわりから、病院都合の出産は絶対避けたかった、近所の産婦人科に始まり、5軒目で決定
- ・産むのは私、絶対自然分娩できる自信があるという強い意志に夫も義母も（病院）を諦めた
- ・犬猫でさえ本能として出産できるのに、人間の場合お産は寝ているだけしかできないのは不思議と、最初の出産の時からいろいろこだわりがありました
- ・夫が立ち合える所を探していた
- ・自分のニーズを聞いてくれるところを搜した
- ・出産するのはここしかないと誰にも相談せず独断で決定
- ・生まれたときの初めの1口をおっぱいにしてくれるところ

病院出産への批判

- ・大きな病院で産むのだけはイヤだった
- ・自然出産の本を読み、総合病院を予定日1か月前でキャンセルし無理にお願いする
- ・オートメーションのような診察システムがイヤで、ここに来るまでに2つの病院をまわった
- ・能率主義と、半病人かのような扱われ方に頭にきた
- ・紹介してもらった個人病院での押しつけの指導やラマーズ法のテープを買わされたりと腹が立つことばかり

宗教上の考えから

家が近所だから・母親もここで出産したから

350字書かれており、記述内容の少ない者は1ページで、最高は20ページもあったが、4～6ページが平均的な長さであった。記述は退院前日か退院当日になされていた。

2. 内容の分析結果

記述内容を分析した結果、女性と助産婦との関係に関するカテゴリーとして「出産場所の選択」「自分のことを知っていて欲しい」「出産の場が生活空間であること」「助産婦の態度や姿勢」「確かな助産技術の提供」「感謝の念」「自己コントロール」「母親としての自覚や覚悟」「ものの見方の広がり」「女性としての喜び」の10事項が抽出できた。

「出産場所の選択（表1）」では、初産婦、経産婦にかかわらず、出産に対する何らかのこだわりをもっていた。また、病院産でのルーティン化した関わりへの批判から助産院を選択したという内容であった。「自分のことを知っていて欲しい」では、反対された結婚、夫の会社の倒産、離婚体験、病気、自分の仕事のこと、夫婦のこと、上の子どものこと、初めての妊娠に

至った過程、これまでの妊娠・出産体験、今回の妊娠経過、今回の分娩時の夫や家族の言動、分娩時の自分の態度など自分を中心とした様々な内容が記述されてあった。

「出産の場が生活空間であること（表2）」では、時間的にも空間的にもリラックス出来る雰囲気があることが最大のメリットであり、最小限の医療設備の中で、まるで家庭のようにくつろげると、助産院が女性たちにとって如何に自然体でいられる所か、が伝わる記述内容であった。

「助産婦の態度や姿勢（表3）」では、丸ごと受け止めてもらえることに安心感を覚えている。胎盤に手を合わせる助産婦の姿に自然に対する謙虚さを感じ、そのような助産婦から人としての生き様をも学び取っていることが分かる。

「確かな助産技術の提供（表4）」では、技としての助産婦の手に、最新の機器にも劣らぬ信頼感や満足感を感じている。そして、継続的に関わっているからこそ、助産婦はその人に応じた診断や技術の提供をしていることがうかがえ

表2 出産の場が生活空間であるということ

助産院の雰囲気

- ・分娩室はもっと緊張の場だと思っていたのに、先生が主人と話すごく普通の会話に気持ちも随分リラックスできた
- ・こちらにお世話になってみて、ごくごく自然体で、何もかもができることが改めて感じられた
- ・お産も子育ても生活から切り離されたものではなく、その一部だと実感

最少限の医療設備とアメニティ

- ・足もくくらない、酸素マスクもない……何にもない、ただ私がいきむのと先生の暖かい手があるだけ
- ・内診台が上がっていく恐怖心もなく、受診はリラックス出来て良かった
- ・私の好きな木造家屋、掃除の行き届いた室内、きれいにみがかれた床、ゆったりとした時間の流れにまるで家庭のようにくつろげる
- ・目覚めたとき自分の家で眠っていたかの様な錯覚があった

拘束のない時間の流れ

- ・いいお産をさせてもらって、今ゆっくりと時間が流れている感じです
- ・のんびり、ゆっくり、世間の時を忘れて、実家にいるような感じ、この時を過ごすためにもう一人作ってほしいと思うほど
- ・入院中とても静かにゆっくり時間が流れていくのはどうしてかと考えてみると、前回の様なマニュアルがないからだ
- ・ここで1週間ののんびりと過ごすことが出来、心も体もリフレッシュされました
- ・ここでのゆったりした時間は心も体もグングン回復し、家に帰ったらガンバルぞとパワー充電出来ました

自然なもてなし

- ・赤ちゃんが人間らしい扱いを受けました
- ・食事は細やかな心配りで高価な食事でも太刀打ちできないと思う
- ・季節感のある献立や盛りつけ（あじさいの花が添えられていた、菊づくしの会席料理）etc. 心のこもった美味しい食事への記述多数

表3 助産婦の態度・姿勢

丸ごとの受け止め

- ・いろいろな質問に、すっかり不安を取り除いてもらい、絶対ここで産みたい
- ・こちらの話を十二分にじっくり聞いて下さり、何とも言えない安心感・信頼感を覚えた
- ・いろんな人生の失敗や、後悔も自然に私全体として受け止めてくださった
- ・心配も不安も全部ひっくり返して受け止めて下さりそれを幸せに変えて返してくれる大地の母のような先生のもとでお産が出来たことを幸せに思う

安心感

- ・初診で、先生と患者ではなく、女性と女性、母と娘のような会話に、あーこの先生なら安心してお産が出来る、この人にならお任せできると思った
- ・陣痛発来し、先生の玄関に入っただけでまだ出産していないのにもうこれで大丈夫と思った

助産婦の自然に対する謙虚さ

- ・胎盤にありがとうと言っている先生の姿に、私も手を合わせてお礼を言った

助産婦としての生き様

- ・全てを当たり前のこととして気負いもなく、淡々とこなしていける先生の姿勢は身構えることの多い私にとっていい勉強になりました
- ・先生の生き方に考えさせられるものがあった
- ・先生が心の底から喜んでくれ、とても嬉しく感謝している
- ・この方は助産婦になるために生まれて来たんだと思った、いろいろなことを学んだ
- ・先生自身が光り輝いていてとても印象に残った
- ・何気ない一言で安心できる
- ・優しい笑顔で元気づけられた
- ・はつらつとされ、受容力があつた

表4 確かな助産技術の提供

助産婦の技としての手

- エコーで子どもの写真は見れなくても、これが頭でこれがお尻このグリグリは肘かな膝かなの説明に、わたしの赤ちゃん、先生には見えてるんだわと大安心の妊娠生活だった
- 超音波でベビーの状態を見るのが楽しみであったが、今日、先生の手（外診）に文明の利器よりははるかに信頼を覚えた
- きれいな手、細い手、その手にパワーと微妙な読みとれる力を感じる…聖なる手
- 内診の時、全然痛くないというのも不思議
- 必要以上の内診がなく、触診の手が優しい

その人に応じた導き方

- かゆいところに手が届くような心配りの指導
- 赤ちゃんや女の人の身体についての深い眼差しを簡単な言葉で沢山もっていらっしゃる
- 定期検診を受けている間に先生との信頼関係が深まり、本番が近づいてくるにつれすっかりお産に対する自信ができました
- 時に厳しく、時に優しい分娩時のタイミングよいかけ声
- そばにいて腰をさすったり、押したりしてくれ、こんないたれりつくせりして頂き幸せに思っている
- 立ち会いにはno! と言っていた夫を、先生が呼び入れてくれ感激、我が子の頭をなでる夫の様子はまるで別人でした

確かな助産技術

- 傷もなく、出血も少なく、腫れもせず産後が楽です
- 毎朝子宮の収縮具合や乳房の様子を丁寧に見て下さってありがとう
- 痛くないマッサージ
- 最初からおっぱいで、こんな育児のスタートを切ることができ、幸せいっぱい

表5 感謝の念

- 子どもだけでなくもっと沢山のものを頂いた
- すべての人に感謝してこの子を育てます
- みなさんほんとうにありがとう、何度言っても言い尽くせません
- 周りの多くの人の人たちの優しい言葉や心遣い、その一つ一つを受けた喜びに涙が出てくる
- 主人や主人の両親など様々な人の思いやりと励ましに心から感謝
- 全ての人にありがとうと言いたくなるような謙虚な気持ちにさせてくれたお産にありがとう
- 暖かい言葉で勇気づけられ、今日の日を迎えられたことに心から感謝
- 出産は1人の力ではなく先生はもとより家族や周囲の方々の協力なくしては成り立たない素晴らしいものです、みんなへの感謝への気持ちを忘れないようにしなくては
- 沢山の方の支えによって出来たこの幸福な出会いを心に、頑張っていきたい
- 周りの人の協力があってこそいいお産ができた
- 自分の親に感謝、親の気持ちがわかるよう、成長したい
- また1つ宝物がふえて、子どもに生きる力を与えてもらって、子どもを産むごとに強くなっていくようです
- 新しい家族は天からのプレゼント、頑張っていこう

る。

「感謝の念（表5）」では、あふれんばかりの女性たちの感謝の気持ちが伝わってくる。女性たちは助産院で出産体験した結果（表6）、「自己コントロール」する力に気づき、「母親とし

ての自覚や覚悟」を高め、「ものの見方の広がり」が出来、「女性としての喜び」を表現していたと見なせよう。

表6 助産院での体験の結果

【自己コントロール】 ・自分で助産院を選ぶことにより、体操をするようにしたり、食事に気を付けるようにした ・私のために必死になっている先生の姿に、私が頑張らねばと思った ・食事毎の器、献立、盛りつけの一つひとつに、毎日生活をまじめに送ってますかと問われている気がした ・落ち着いた環境の中で自分自身を見つめ直せた ・ここで産んで私自身も成長したようです ・先生のようにみんなから感謝され、信頼されるよう少づつでも頑張りたい ・大きな病院で産んでいたら感謝の気持ちには到底ならず、大きな顔したまま家に帰り、大きな顔で皆に甘えていたと思う
【母親としての自覚・覚悟】 ・もっともっとやさしく強い母親になろう ・自分自身を見つめられ、家に帰っても頑張らなくては強い自分になれます ・自分を見つめる機会を得ました ・今回のお産を通してまた少し、母親として、ナースとして、人間として成長出来たように思います ・私達は子どもに、何をするのか、何を残すのか等考えた ・子どもが大きくなったら私の素晴らしい経験をちゃんと聞かせよう ・家族のために精一杯のことをし、子どもを育てていくことは世の中への恩返し
【ものの見方の広がり】 ・何もかもが表面的なきれいな事にすりかわっていくような現代の生活の中で生命の根源的な場面に立ち会った体験は貴重だった ・神様から頂いた主人そして康宏君とともに少しでも世間の方に恩返しできる自分であるように取り組んでいます ・今まで見えなかった人の心が見えてくる気がしました、そして、忘れかけていた人の心の豊かさを思い出させて頂きました ・妊娠したことによってあらゆる生命の大切さつつがりの尊さを学ぶ ・プログラムに追われず、ゆっくりとした時間の中で過去を反省し、これからのことを考えた ・平凡な日常生活の中でほんのちょっとした子どもの成長も、自分の生命の存在を問い直すきっかけを与えてくれる、母親って世界がどんどん広がってゆく大事な体験をしているんですね ・可愛らしい赤ちゃんが我々2人の子どもだという実感が、これからの私たち夫婦の生き方に確かな方向を示してくれそうです
【女であることのすばらしさ】 ・女であることのすばらしさをいろんな人に感じさせてください ・このような助産院がもっとあったら女性は産むことに喜びを感じて出生率が少しはあがるんじゃないかしら ・女に産んでもらって良かった、出産をとおして私は女は得だとあえて言いたい ・女に産まれた喜びと子どもに対する愛情があることは素晴らしい

考 察

1. 女性と助産婦の信頼関係

助産院を選択した女性たちは病産院選択者より、出産に関する自己決定能力は高く、それには出産への関心度が影響していると先行研究¹⁰⁾にある。「お産は病気ではないので病院で産むことには抵抗がある」というように女性たちは

出産に対する明確な考えをもち、「犬猫でさえ本能として出産できるのに、人間の場合お産は寝ているだけしかできないのは不思議……」と自然出産への関心は高く、「産むのは私」と自分の身体に対する信頼感をもっている。また、「オートメーションのような診察システムがイヤで……」と病産院での現状も知っており、病産院都合でシステムティックに行われる診療に

対して疑問を感じている。一方、「近所だったから」、「親もここで出産したから」という人たちも、継続的に親身に関わってくれる助産婦に、安心や信頼感をもって出産を引き受け、乗り越え、自信を持った出産体験ができたとしている。

彼女たちは不安なこと、分からないことなど「こちらの話を十二分に聞いて下さり……」と何でも何時でも質問出来、自分の話したいことに充分耳を傾けてくれる助産婦に「絶対ここで産みたい」「この先生なら安心」と安心感や信頼感を覚えている。その話題となる内容は「いろんな人生の失敗や、後悔も自然に私全体として受け止めてくださった」というように妊娠や出産に関することだけでない。妊娠に至るまでも今回の妊娠中も女性は様々な体験をしながら胎児との生活を送っている。その時感じたことや不安を聞いてくれる存在が必要なのである。また、「優しい笑顔で元気づけられた」「先生と患者ではなく、女性と女性、母と娘のような会話……」のように、助産婦は優しい笑顔で、ある時は聞くことに徹し、ある時は同性の立場や人生の先輩として意見を述べ、またある時は専門的な立場からアドバイスをするという接し方を女性たちに行っていることが伺える。女性が必要とするときに助産婦が話を聞き、本人の視点を尊重するということが重要で、女性も尊重されていると感じるとき、自他コントロールが出来ていると感じる¹¹⁾といわれている。

そしてこの女性と助産婦との信頼関係が生活空間の中で育まれていることがうかがえる。旬の素材で季節感のある美味しい「食事」に対する記述はもっとも多かったが、「掃除の行き届いた畳の部屋」で、世間話を交えた会話をしながら、健診時入院中も時間に拘束されないという生活空間とは、女性にとって心身共にリラックスでき、贅沢な気分を味わえる場であろう。「のんびり、ゆっくり、世間の時を忘れて、実家にいるような感じ、この時を過ごすためにもう一人作ってもいいなと思うほど」と記述されている。

全ての助産院がF助産院と同じではないが、

女性たちには、「足もくくらない、酸素マスクもない……何もない、ただ私がいきむのと先生の暖かい手があるだけ」「入院中とても静かにゆっくり時間が流れていくのはどうしてかと考えてみると、前回のようなマニュアルがないからだ」のように、最新の医療機器、時間に追われる診察や入院生活は望まれていないのである。助産院だからと言って陣痛の苦痛が少ないわけではない、赤ちゃんの扱いがすぐに出来るようになるわけでもない。しかし、出産の場が生活空間であることが、女性と助産婦の絆をより強めるのに作用していると考えられる。生活の延長線上で行われる妊娠・出産や子育ての開始が自分と赤ちゃんのペースでのんびり、ゆっくり出来ることは大変重要な点である。

2. 助産婦の女性に与える影響

イギリスのマタニティー政策が中心に掲げている3Cとは、choice（選択）continuity（継続）control（コントロール）¹²⁾のことで、これをキーワードに政策が展開されている。情報はあらゆる段階で大切なことで、それによって女性たちは選択し、継続ケアを受け、自分でコントロールする力を養っていくのである。不十分なケアや社会心理的要因（情報不足だったり、継続ケアが受けられなかったり、協力的でないスタッフの存在）がコントロールに影響し、充足感や達成感も低い¹³⁾ことはすでに明らかにされている。

今回抽出されたカテゴリーをもとに助産院選択女性の経験世界について図1に表した。「出産場所の選択」や「自分のことを知っていて欲しい」という女性のニーズに対して「助産婦の態度や姿勢」「確かな助産技術の提供」といった助産婦の対応が継続的に行われている。そしてそれが「生活空間」の中で実施されている。女性たちは「感謝の念」を表出し、これらの結果として「自己コントロール」「母親としての自覚や覚悟」「女性としての喜び」「ものの見方の広がり」に繋がっているという関係性が成立していると考えられる。

つまり、継続的なケアが生活空間の中で行わ

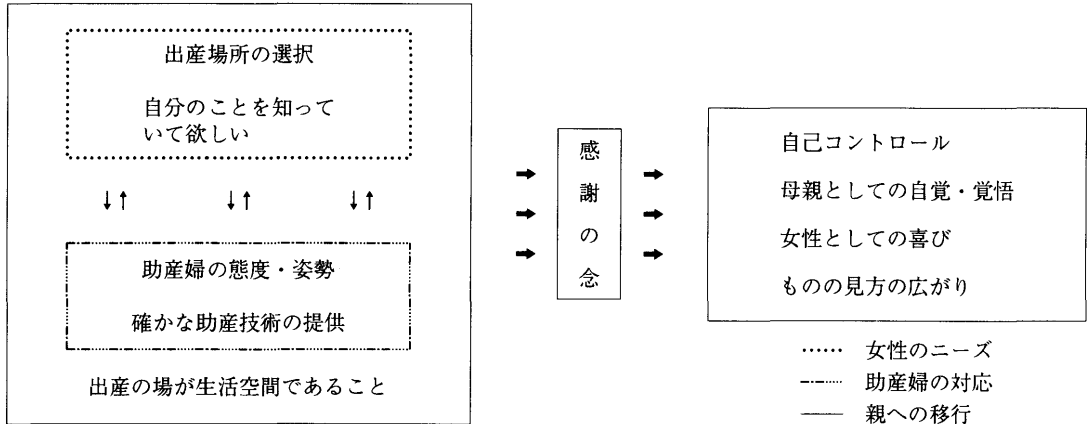


図1 助産院選択女性の経験世界

れることで女性と助産婦との絆は深められる。女性たちは様々な感謝の気持ちから、自己コントロールが出来、強さと優しさをもち、女性として、親として、人としての成長を感じ取っている。人は尊重され、優しくされることで、他者に対しても優しくできる。最愛の我が子を優しく世話してもらうことにより、自分も子どもに対して優しくなれる。特に産褥期は身体の内部環境的にも大変センシティブな時期である。そのような時期に、自分のペースでゆったりと我が子に接する時間は最大限尊重されるべき時であり、日常的な生活空間で実家の母のような専門家から受ける援助は、女性を親になることへとスムーズに導いていることが分かる。

正常な妊娠・出産ケアとは、一人ひとりの女性とその家族を尊重し、身体的にも社会心理的にも充足感が得られるようにし、親へのスムーズな移行を助けるといったことがバランスよく保たれた状態であろう。そのためには「大事をとって処置を施す」といった医学的関わりではなく、助産婦本来の姿でもある「女性の持つ力」を信じて「見守りながら待つ」¹⁴⁾ 関わりを、マタニティーケアのどの段階でも実行することが重要である。今回の結果より、助産院では助産婦のケアが女性たちの成長に繋がっていることが明らかになったといえよう。

終 わ り に

F 助産院での女性の記述内容が「産む女性」全体の経験世界を反映しているわけではないが、その一端を表していると考えられる。

「より良いケアとは、医学的な安全性には妥協せず、継続性、安心感、柔軟な対応を求めること」であるが、「医学的な処置が中心となっている現在のシステムでは、より良いケアを求めることは決して簡単なことではない、しかし、変化は始まっている。助産婦や医師の意識が変わることが重要、そして、それ以上に女性が依頼人として適切な扱いを受けることに目覚めること」と Lesley Page¹⁵⁾ は述べている。

今回の記述の中に「何の設備もない助産院を何故選んだの」という助産婦からの問いに、「こんな聞き方をしてくれる助産婦なら安心」とも記述されてあったが、助産院の女性たちはその意識が目覚めた人たちであるといえよう。

一般的に、多くの女性たちはここまで出産に対して明確な考えを持っていないと考えがちであるが、その前に果して女性たちの考えや思いを充分聞いているであろうか。今回の結果から、女性がありのままの自分をゆっくり表現出来るように、時間的空間的な配慮を女性の1人ひとりに充分に行っているかあらためて振り返ってみる必要を感じる。合わせて、言葉を使い、ま

なざしや仕草等の言葉以外のものを使い，手を使って，他者とのつながり¹⁶⁾を深め，維持発展させている助産院の先輩助産婦から学ぶことが多いことにも気づかされた。

文 献

- 1) Murray Enkin, Marc J. N. C. Keirse, Mary Renfrew, et al: A Guide to Effective Care in Pregnancy & Childbirth 1995, 北井啓勝監訳，妊娠・出産ケアガイド—安全で有効な産科管理—，医学書院 MYW, 1997; i-vi
- 2) Kate Jackson: Changing Childbirth. 24th International Congress of Midwifery, 1995, 戸田律子訳，お産を変える—第24回 ICM オスロ大会基調講演から—，助産婦雑誌，1998; 52(4): 34-39
- 3) 戸田律子訳：WHO の59カ条お産のケア実践ガイド：農文協，1999; 42-44
- 4) 戸田律子訳：前掲書：12
- 5) 日隈ふみ子，脇田満里子：助産婦に求められるもの—助産院にて出産した母親の自由意見を通して—，藍野学院紀要，1988; 65-71
- 6) 有森直子：出産に関する妊産婦の自己決定，日本看護科学会誌，1999; 19(2): 33-41
- 7) 堀内成子，島田啓子，鈴木美哉子他：出産を体験した女性が評価する妊産褥期のケアの質，日本助産学会誌，1997; 11(1): 9-16
- 8) 松岡悦子：助産所出産の安全性を考える—助産所出産が安全なわけ—，助産婦，1996; 50(1): 63-65
- 9) 宮崎文子，古田祐子：有床助産院の経営特性についての比較検討—全国有床助産院の実態調査より—，日本助産学会誌，1998; 12(1): 27-38
- 10) 有森直子：前掲書
- 11) Green J, Coupland V, Kitinger J: Expectations, experiences and psychological outcomes of childbirth; A prospective study of 825 women Birth, 1990; 17: 15-24
- 12) Kate Jackson (戸田律子訳)：お産を変える—第24回 ICM オスロ大会基調講演から—，助産婦雑誌，1998; 52(4): 34-39
- 13) Green J, Coupland V, Kitinger J: 前掲書
- 14) Lesley Page: Effective Group Practice in Midwifery, 1995, 青野敏博監訳：生まれ変わる助産婦たち，医学書院，1996: 36-37
- 15) Lesley Page: 前掲書：70-73
- 16) 村上陽一郎：医療と医学のはざま，日本看護科学会誌，2000; 20(1): 57-64